

“教育山形「さんさん」プラン”を基盤とした授業改善のポイント 村山教育事務所

1 はじめに

村山管内の各学校では、“教育山形「さんさん」プラン”を生かしたきめ細かな指導を基盤とした授業づくりが行われ、一人ひとりの確かな学力の育成を目指した授業改善が推進されている。

本事務所では、教科のねらいを達成し、子どもが確かな学力を獲得するために、リーフレットや授業改善チェックシート（下記参照）を作成した。「教科の本質に迫る単元、題材構想」「自ら学びを調整する振り返りの充実」「ICTを活用した学びの環境整備」「指導と評価の一体化による指導方法の工夫・改善」の4つのポイントで授業改善を示すとともに、生徒指導の実践上の視点を授業の中で意識し、授業において発達支持的生徒指導を行う「学習指導と生徒指導の一体化」について助言することで、日常の授業の中で「学習指導と生徒指導の一体化」の重要性を意識し、よりよい人間関係の構築に努めることができるよう改善を図った。

令和6年度「自立した学習者」を育成するための授業改善チェックシート 村山教育事務所指導課

全ての子どもが確かな学力を獲得し、生涯にわたって学び続ける自立した学習者になるために、私たちの児童生徒観・教育観を転換し、一人一人の子どもも主眼とした授業改善を行うことが求められています。「個別最適な学び」と「協働的な学び」の観点から学習活動の充実の方向性について改めて捉え直し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めていく上では、学習指導に「生徒指導の実践上の視点」を生かすことが不可欠です。

自立した学習者になる

確かな学力を獲得する
基礎的な学力
思考力・判断力・表現力等
学びに向かう力、人間性等

主体的・対話的で深い学び

自己存在感の醸成
自分も一人の人間として大切にされていると感じる

協働的な人間関係の育成
自他の個性を尊重し、相手の立場に立って考え行動できる

ICTを活用した学びの環境整備

□子どもが学習の促進を立ったり、自分に合った多様な方法で学習を進めたりする環境を整える。
□子どもが、縦次や時間的・空間的制約を超えた多様な他者と協働する環境を整える。

指導と評価の一体化による指導方法の工夫・改善

□子どもがつまづきを克服し、資質・能力を獲得した具体的な姿を想定した評価規準を設定し、適切な支援を行う。
□子どもが、単元を通して獲得を目指す資質・能力を自覚し、学習に取り組むことのできる評価を行う。

自己決定の場の提供
学習において自ら考え、選択し、決定する、発表する、制作する等を体験する

個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実

完全・真心な風土の醸成
一人一人が、個性的存在として尊重され安全かつ安心して教育を受けられる

2 村山管内における実践から

学習指導要領及び第6次山形県教育振興計画、“教育山形「さんさん」プラン”を踏まえた確かな学力の育成に向けて、学習指導等の課題の解決を図る実践的な研修会として教育事務所研修を実施し、教員の指導力の向上を目指した。

(1) 第1回学習指導力向上研修会（兼）村山地区協議会の実施

「生徒指導提要が示すこれからの生徒指導

～学習指導と生徒指導の一体化を中心に～」（講義・演習）

各学校における学習指導や生徒指導の中核を担う先生方を対象とし、確かな学力と自己指導能力の育成に向けて指導力の向上を図ることをねらいとして研修会を実施した。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実していく上で、学習指導に「生徒指導の実践上の視点」を生かすことの大切さを理解するとともに、その具体的な授

業づくりについて研修を深めた。生徒指導を意識した授業をつくるには、必ずしも新たな実践や特別な手立てを行うわけではなく、日々の授業や学級経営で「当たり前」にしている工夫・配慮を生徒指導の視点で捉え直すことが大切であることを実感できた。学習活動を「生徒指導の視点」で捉え、意図的に組み込むことで、指導者の言動や姿勢が変わり、日々の授業が変わっていくことを考える機会となった。

(2) 第2回学習指導力向上研修会（兼）幼保小中接続推進研修の実施

「幼児期における子どもの育ちを生かす育の在り方」（講義）

「幼児期の自発的な遊びから、学びへつなぐ

～子どものやりたいが生まれる環境を目指して～」（実践発表）

幼稚園、認定こども園、保育所の幼児教育に関わる先生方や小・中学校、特別支援学校の先生方を対象とし、幼児教育で重視されている「一人ひとりに応じた指導」や「環境を通して行う教育」の意義を再確認し、幼保小中における育ちや学びの一貫性・連続性について理解を深めることをねらいとして研修会を実施した。

幼児期における子どもの育ちや学びを小学校以降の教育へとつなげるための具体的な方法について、幼児教育施設での実践の発表や小学校での生活科・教科の学習など様々な事例を通して学びを深めた。架け橋期の子どもについて、自ら学び、考え、行動する主体的な存在であるという子ども観・教育観に立ち、「見ればわかる」と「見ただけではわからない」子どもの表現を推量しながら子どもを捉えることが、一人ひとりの多様性を理解し、子どもの育ちや学びにつながることを考える機会となった。

(3) 第3回学習指導力向上研修会（学校経営指導訪問支援型の一環）

「主体的に学びを創る子どもの育成

～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実～」（講義）

本研修会では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実していく学校の主体的な研究の取組みを公開していただき、村山管内の小・中学校に学びを広める場とした。国語・算数・総合的な学習の時間・特別支援の4つの部会を公開し、子どもの主体的に学習に取り組む力を引き出したり、深めたりするための教師の指導や支援について学びを深めた。支援型の小学校の先生方からは、「学校研究に沿って指導主事が関わることで、主体的に学びを創る子どものイメージを具体的に持つことができた。」「教科部会で、教科の本質に迫る系統性のある授業づくりを行うことで、教師の主体性が高まり、一人ひとりの子どもを主語にする授業につながった。」などの感想があった。子どもの個性や学び方の深い理解に基づいた、教科の本質を捉えた教材研究を重ねることこそが自立した学習者を育成する上で不可欠であることを再認識する機会となった。研修を実施するにあたっては、継続的に学校の研究に関わることで、先生方ともに学びを深める好機となった。これからも先生方の授業づくりに寄り添いながら、伴走者として学校の研究を支援していく。

3 おわりに

「各学校で育成を目指す資質・能力」を明確にし、全教職員の共通理解のもと、日常的に授業改善に取り組んでいる学校が増えている。各教科等の指導と生徒指導を一体化させた授業づくりについて周知していくことを通して、一人ひとりの子どもを主語にする教育活動を推進し、本プランの目指す「わかる授業」「いじめや不登校のない楽しい学校」の実現を目指していきたい。

“教育山形「さんさん」プラン”を生かした授業改善のポイント 最上教育事務所

1 はじめに

本地区では、以前から協働的な学びに視点をおいた授業づくりを行う学校が多く、主体的・対話的で深い学びが推進されている。“教育山形「さんさん」プラン“による少人数の利点を生かし、一人ひとりの考えを大切にしながらペアやグループ学習における対話を通じた児童生徒主体の深い学びを目指す授業づくりが進められている。

また、最上教育事務所としてチームで授業を作り上げる「もがみ授業づくり研修『チームMOGAMI』」や、「学習指導力向上研修会」「授業改善へのアクション」等を通じて、各学校における授業づくりを支援している。

2 最上管内の実践から

(1) もがみ授業づくり研修「チームMOGAMI」

最上地区は児童生徒数の減少が著しく進んでおり、どの市町村においても学校規模が小さくなっている現状がある。そのため、1学年1学級という学校や校内に教科担当教員が1人しかいない学校も増えている状況にある。小規模校では、授業実践や授業の悩みを相談する機会が少なくなっており、校内OJTに課題が見受けられる。そのような状況を打破し、先生方が自信を持って授業をしていくために、「チームMOGAMI」という授業づくり研修を行っている。

「チームMOGAMI」は、3名の先生を1グループとして、グループで相談しながら単元計画から評価までの授業づくりを行う研修である。校内研究では、本時の授業がメインになることが多いが、習得、活用、探究のバランスの取れた単元づくりを中心に検討を重ねることで、教員の学習指導力の向上を目指している。普段は同じ学年・教科の先生と一つの単元についてじっくり話し合う機会が少ないので、大変勉強になるとメンバーからは好評である。

今年度は、小学校国語、中学校理科の2部会を開催し、3回の研修と授業実践の研修を行った。

① 小学校国語

授業実践：戸沢村立戸沢学園 第6学年 国語

単元名：「おすすめパンフレットを作ろう」

助言者：最上教育事務所指導主事 今坂 里美

② 中学校理科

公開授業：新庄市立八向中学校 第2学年 理科

単元名：「電流と磁界」

講師：山形大学名誉教授 中井 義時 氏

参加したメンバーからは、「チームで単元計画をつくることで、今までの自分にはない視点を取り入れることができました。他の先生方と情報を共有できたことは、貴重な経験で非常に勉強になることが多かったです」という感想があり、実践を通じて成果を感じている様子を伺うことができた。また、授業研究会の参加者からも講師の先生の講話内容も含めて、今後の授業改善につながる研修になったとの評価を受けた。

(2) 学習指導力向上研修会

全国学力・学習状況調査の結果を授業改善に生かしていくために、学習指導力向上研修会を開催している。今年度の学習指導力向上研修会では、各学校の研究主任の先生方中心に参加いただいた。

また、研修会では、全国学力・学習状況調査の分析説明を行った後、授業改善の課題の一つである「学習評価」について、山形大学教職大学院 准教授 鈴木貴子氏を講師に迎え、「全国学調の問題から授業づくりを考える」をテーマに講義と演習を行っていただいた。講義・演習を通じて

- ・ **目指す姿を子どもと共有**することで子どもたちが力を発揮しやすくなる
- ・ ゴールの姿を具体的に描き、「**逆向き設定**」で授業を考える
- ・ **OUTPUT**（アウトプット）と **FEEDBACK**（フィードバック）を大切に

などの指導と助言をいただいた。

先生方からは、「確実に力を付ける授業づくりのためのポイントとなる点について、具体的に学ぶことができました」「実際の単元構想や授業づくり、教材研究のイメージを持つことができました」等の好意的な感想が多かった。

(3) 授業改善へのアクション

地区全体の全国学力・学習状況調査の結果を分析し、授業改善に向けて地区全体で共通に取り組むべきポイントを3点示した。（下図参照）

授業改善へのアクションについては、参加した研究主任の先生方が、学校で全教職員に伝達するようにしている。また、学校訪問等の全体指導や授業後の協議の場などで、事務所の指導主事が授業改善へのアクションの視点を踏まえた助言指導を行っている。各校において、どの視点を重視していくか明確にするようお願いをし、授業改善に活用いただいている。

R6 授業改善へのアクション(地区としての取り組み)

教科の本質を捉えた**基礎・基本の確実な「習得」**を目指した授業づくりの日常実践

- ①各教科・単元において「習得」場面でおさえない基礎・基本事項を明確にする。
- ②教科特性を踏まえた「見方・考え方」を働かせ、個の学びを保障しながら協働的な学びにおける対話の質を高める学習活動を仕組む。
- ③本時の学びを見童生徒が振り返り、学びを家庭学習につなげ、家庭学習での学びを授業に生かす。

教科におけるつけたい資質・能力を明確にした**適切な評価の実施**

- ①教科においてつけたい資質・能力を明確にした単元を構成する。
- ②具体的な評価規準を作成し、見童生徒と共有する。
- ③本時における子どもの学びを評価するための評価問題・活動を必ず実施し、見童生徒の学習改善・教師の指導改善に生かす。

見童生徒質問紙と学校質問紙の分析を行い、**校内研究のレベルアップ**につなげる

- ①見童生徒質問紙と学校質問紙の回答状況や相違点等について校内で共有し、改善、検証を継続して行う。
- ②日常の授業改善や定期的なアクションプランの見直しを行い、C(チェック)A(アクション)の充実を図る。
- ③目標達成に向けた、必然性のあるICTの活用を行う。

3 おわりに

「主体的・対話的で深い学び」を実現するには、「さんさん」プランを活用し、指導と評価の一体的推進が重要である。授業改善を通じたよりよい授業づくりについて、今後も先生方を支えていきたい。

“教育山形「さんさん」プラン”を基盤とした授業改善のポイント 子ども主体の授業づくりに、教師も探究心を持って挑戦！

置賜教育事務所

1 はじめに

管内の学校では、「さんさん」プランのよさを生かし、確かな児童生徒理解に基づく子ども主体の授業づくりを目指して、様々なアプローチで授業改善が進められている。これは、「おきたまの教育」で掲げている「子どもも大人も、ともに学び合える喜びを感じるような一日、一日をつくる～誰一人取り残さない教育の実現～」につながるものである。子どもたちは誰もがわかるようになりたい、成長したいという前向きなエネルギーを持っている。そのような子どもたちの力を信じ、授業の中でも誤答を大切にしたり、一人ひとりのよさや変容を価値付けたりする教師の日常的な関わりが多く見られる。

2 置賜管内における実践から

(1) 誰一人取り残さない授業づくりプロジェクト

① 各教科ならではの学びを深めるアプローチ

小・中学校教員の合同チームと指導主事が、「子どもの実態や発達段階に即して、誰一人取り残さず、子ども一人ひとりに自ら学びをつくっていく力を育む授業づくり」に取り組み、3年目を迎えた。1・2年目は、教師が一斉に教える授業から、子どもがやってみたいという思いを持続させながら自らが主体的に学ぶ授業へと教師の授業観を転換し、新たな単元開発を行い、公開授業研究会でその成果を提案してきた。今年度はさらに、子どもが教科の見方・考え方を働かせ、単元ごとに学んだことや自らが獲得した学びのサイクルを次の学びへと活かしていくような授業づくりを目指した。算数と社会の実践事例を以下に示す。



<小学5年：算数>

単元名「角柱と円柱」



「多様な考えを生かしたい図形の単元でも単元内自由進度学習は可能かどうか」

【目指す子どもの姿】

- *自らの学びを客観的に捉え、自己調整
- *見方・考え方を働かせて、獲得した数学的な表現を使って説明することができる。
- *教科書やICTを自由に使うことができる。

<小学4年：社会>

単元名「きょう土を開いた人」



【目指す子どもの姿】「問題解決的な学習サイクルを自ら回し続け、学びを深める姿」

【重視したこと】

- *児童主体の必要感のある学習計画づくり
- *見方・考え方を働かせて資料を読み取り資料をもとに考える学び方を身に付ける。(ICT・副読本活用)
- *自己評価と振り返り

② 確かな見取りと教師の指導性の大切さを実感

「一人ひとりの学びを見取ることは難しいが、教師の見取りの質を高め、見取りを次の支援に生かすことで子どもはどんどん自分で課題解決に挑んでいくようになる」、
「これまで、本時で全員にここまで到達させなければならないという思いが強かったが、単元で付きたい力に向かって、本時ではその子がどのように学んでいたか、それならば次時にどのような支援が必要かを考えるようになった」これらは、授業者や参観者から寄せられた声である。本プロジェクトで目指している子ども主体の授業は、決して子どもに任せっぱなしの授業ではない。「主体的・対話的で深い学び」を実現さ

せるためには、教師が単元で育成すべき資質・能力を明確にすることは勿論であるが、その子の学びのストーリーに着目しながら、単元の目標に照らして意図的な支援や学びの環境づくりを行うことが不可欠であることに、改めて気付くことができた。

(2) 校内研究を中核として、チーム学校で取り組む授業改善

① 教育事務所主催の資質・能力向上研究協議会（5月・1月）

標記研修会では、「実行性のあるアクションプランについて」説明し、校内研究のさらなる充実に向けて参加者同士が悩みや課題について対話する時間を設けた。研究主任や教科担任マイスターを中心として、子どもが学び方や学習計画を自己選択・自己決定しながらいきいきと学ぶ授業に挑戦している学校も増えている。



② 子どもの学びと教師の学びは相似形

研究主任同士の対話で話題になったことは「事後研究会」の持ち方である。管内の学校では、着目する児童生徒を決めて1時間を通して学びの様子を記録したり、タブレットで撮影したりして、子どもの事実に基づく協議が行われている。また、協議後にリフレクションの時間を設け、参加者全員が自分の授業に生かしていきたいことをタブレットに蓄積している学校もある。そのような学校では、校内研究で先生方がつながっている風土を感じる。



(3) 夢や目標の実現に向けて、子どもが安心して学ぶことができる学級づくり

一斉授業においては、人と比べて自信をなくしたり、できない自分を責めたりして、粘り強く考えることをあきらめている子どもたちがいるのではないだろうか。教育活動のあらゆる場面で、その子自身の持ち味を發揮して自己の成長を実感できる場や、キャリア教育を柱として自分のよさや可能性を認識しながら生き方を考えたり、学ぶことの意義を実感したりできる場を設けることで、子どもが自分らしく学びに向かう姿を目指したい。そこで、今年度も「特別活動」に焦点をあてた研修会を実施した。

① 地区いじめ・不登校防止連絡協議会 ② 教育事務所における5年経験者研修
 ・演題「語り、語らせ、語り合わせる、キャリア・カウンセリング」講師：長田徹教授
 ・演題「楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動」講師：杉田洋教授

日常の授業の中でも「生徒指導の実践上の4つの視点」を意識し、学習指導と生徒指導の一体的な充実を図っていくことの大切さを実感する時間となった。

3 おわりに

今年度も、「子どもが自ら学びをつくっていく姿とは？」という問いを持ち、先生方が主体的に授業改善に挑戦する姿が見られた。根底には、子どもたちの成長を願い、その子の可能性を伸ばしてあげたい、予測困難な未来を幸せに生きていくことができるようにしたいというあたたかい思いがある。今後も、さんさんプランを基盤として、「学校が楽しい、みんなで学ぶことが楽しい」と思える授業を子どもと共につくっていききたい。

“教育山形「さんさん」プラン”を基盤とした授業改善のポイント

庄内教育事務所

1 はじめに

庄内教育事務所管内では、各学校において児童生徒の確かな学力の育成を目指し、“教育山形「さんさん」プラン”を生かしたきめ細かな指導を基盤とした授業づくりに取り組んでいる。

各学校への指導・助言の際には、庄内指導主事会で作成している授業づくりワンペーパーを活用し、目指す方向を同じにして授業改善を進めている。

年度末には、ワンペーパーの項目と「生徒指導の実践上の視点を生かした授業づくり」について、庄内指導主事会の全指導主事で評価を行い、管内の授業改善の現状を把握し、次年度の支援につながるよう共通理解を図った。

2 庄内管内における実践から

(1) 学習指導力・特別支援教育力向上に向けた学校サポート訪問の実施

学力向上支援チームによる学校訪問事業終了に伴い、「児童生徒の確かな学力の育成」に向けて学校サポート訪問を実施した。学校のニーズに合わせて事務所指導主事が訪問し、授業参観と事後研究会を通して、授業づくりについて指導・助言を行った。その際、上記「授業づくりワンペーパー」や「学校教育指導の重点 各教科等の指導の重点」を活用し、確かな学力の育成につながる授業づくりのよさを価値づけたり、大事にしたい点について伝えたりしている。学校からは「継続的に指導していただいたことで研修を深めることができた」「分科会ごとに指導していただき、各教科の専門的な視点で話し合いができてよかった」などの感想が挙げられ、各学校の学力向上PDCAサイクルの推進につなげることができた。

(2) 「学力向上研究協議会」の実施

R3年度から、学校研究ワンアップ研修会と学力向上研究協議会を分けて開催している。学力向上研究協議会は管理職及び教務主任を対象として、「学校組織からの学力向上」という視点からのメッセージを伝えることができた。

前半は、全国学力・学習状況調査の県及び庄内管内の結果や分析について、具体的に伝える場とし、各学校において授業改善に生かすことができるよう



にした。

後半は、国立教育政策研究所 直海知子 学力調査官から「算数・数学における確かな学力の育成に向けた授業づくり」というテーマで講話をいただいた。全国学力・学習状況調査の算数・数学の問題から、今求められている力とその育成に向けた授業改善の手立てについて、具体的な授業場面や参加者の事前質問に沿った形で話をいただいた。教科として付けたい力を明確にし、概念形成につながる授業づくりに取り組んでいくことで学力向上に大きく寄与することについて学びを深めた。

【参加者の振り返りより】

- ・学力調査の問題には、現在求められている資質・能力育成のためのメッセージが込められていることから、その問題分析や教材研究を適切に行うことが授業改善へのよきアプローチとなることを再確認できた。
- ・直球は受けられるが、変化球に弱いという言葉が、まさにその通りだと感じた。本物のできた、わかったにつながる概念形成、授業改善をしていかなければならない。付けたい力とは何かを明確にしていくことの大切さを今一度確認したい。

(3) 「学校研究ワンアップ研修会」の実施

本研修会は主に管内の研究主任を対象としており、学力向上の推進に向け、学校研究並びに授業改善推進の中核となる校内リーダー育成を図ることを目的としている。

参加者の傾向として、研究主任経験年数が2年以下の若手の研究主任が増えていることから、第1回研修会を年度初めに設定し、学校間のネットワークづくりにもつながるようにした。

第2回研修会は、福井大学教育・人文社会系部門 小林和雄准教授から「本格的な深い学びを実現する授業づくりのコツ」というテーマで講話をいただいた。教科の本質を学ぶための問題解決的学習、そのための授業研究の必要性など、今後の授業改善や学校研究の推進に向けて、改めて考える機会となった。

【参加者の振り返りより（第2回）】

本格的な深い学びを実現するために、授業をどう考えていけばよいかについて学んだ。まずは、自分が目指す深い学びを具体的にイメージし、ゴールの姿を持っておくことが大切だと感じた。



第3回研修会は、「庄内地区における全国学調の結果から見えること」というテーマで講義・演習を行った。グループ演習では、今年度出題された問題や児童生徒質問調査の結果について分析を行い、授業改善に向けた次の一手を話し合った。参加者の振り返りには、「単元で身に付けさせたい力を教師が明確に持ち、授業に臨むことが必要だと改めて感じた」、「学習が好き、授業がよく分かった」という子どもたちの前向きな姿勢を大切に、望ましい場面設定を行うことを大切にしたい」等が挙げられ、付けたい力を基にした授業改善について共有が図られた。

3 おわりに

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくりを通して、確かな学力の育成を目指していくために、組織的かつ計画的な教育活動が実施されるよう、今後も学校訪問や各種研修会での指導・支援を続け、本プランのねらいである「わかる授業、楽しい学校」につなげていきたい。